

News Letter

世界と共創する
新しい日本文学・日本文化研究

No.1 2010.1

重点領域研究

「世界と共創する新しい日本文学・日本文化研究」の出発に際して

——研究代表者挨拶——

研究代表者（国際日本文学・文化研究所長） 中島国彦

期待される新しい日本文学・文化の世界的な研究・交流拠点

早稲田大学は、長期的な研究展望である「NEXT125」の一つとして、「日文学・日本文化の世界的な研究拠点」の形成のために、「国際日本研究機構（仮称）」の早期の設立をうたっています。「早稲田大学から世界に向けて日本研究を発信し、日本研究の世界的な拠点として内外の研究者を養成する」ことが求められています。「重点領域研究」は、そうした考えの延長として2009年に制定されたものです。わたくしたちのメンバーは、早稲田大学、とりわけ文学学術院において、長い時間をかけて培ってきた日本文学研究、及びそれに連動する日本文化研究のさまざまな成果を活かしつつ、これまで個別に築いてきた海外の有力な研究機関及び研究者たちとのパイプをより強固なものにし、真に国際的と言いつける研究の展開をめざす計画を策定しました。幸いこの計画は採択され、新しい研究所「国際日本文学・文化研究所」を組織し、活動を出発させることになりました。

わたくしたちは、その国際的な展開に見合う形で、これまでの伝統的な日本文学・日本文化研究の枠組みにとらわれずに、新時代に対応した方法と対象とを開拓し、日文学・日本文化研究の再構築をめざしてゆきます。現在、日文学・日本文化研究の新展開をはかるためには国際的な連携が不可欠なものとなっています。他方、早稲田大学からの国際的な発信が、日文学・日本文化研究の国際的な活性化に対して重要な貢献をなすことは言うまでもないことです。この研究は、「早稲田」と「世界」の強力な連携関係を構築することによって、新たな日文学・日本文化研究の〈共創〉Co-Creationを期すものと言えましょう。

国際的な提携と発信の強化

早稲田大学の日文学・日本文化研究は、国内的にはもちろん

のこと、国際的にも確固たる地位を築いてきました。ことに近年では、アメリカのコロンビア大学、フランスのイナルコ（国立東洋言語文化研究学院）等、日本文化研究において世界の中でも指折りの大学・研究機関から厚い信頼を得ており、さまざまな学術及び教育上の共同の事業を展開してきています。今後は、21世紀における「研究のWASEDA」をになうために、こうした「強み」をより強固なものとし、これまでもつながりの深かったアジアをも含めた全世界へ向けて発信する体制を築いてゆきます。

研究の組織化と新たな展開

日文学・日本文化研究は、個々のジャンル・時代別に展開してきたため、それぞれの領域での研究は進展してきましたが、総合性に欠ける「弱み」がありました。そこで、各種の研究・交流プロジェクトを推進することで、全学の日文学・日本文化の研究体制の組織化を図ります。文学学術院を中心に、適宜学内の他学術院や研究機関と提携してゆくことで、この研究活動は、大きな「強み」として、飛躍的に円滑かつ効率的に、全世界に向けて発信されるはずで、そして、この研究分野において、対外的に大学全体を代表する窓口を形成したいと考えています。

わたくしたちは、5つのプロジェクトを設定し、それぞれ多くの人々の協力を得てそれを推進してゆきますが、3つの海外との連携プロジェクトは、2つのテーマプロジェクトと密接な連携を持ちながら、まさにTransdisciplineのかたちで深まってゆくことでしょう。数年後には、そうした研究・教育・交流・発信の成果を皆様に見ていただけるよう、わたくしたちは今後も一致団結して推進してゆきたいと考えております。日文学・日本文化に関心のある全世界の方々のご協力を願ってやみません。

（文学学術院教授）

研究分担者の構成

研究代表者（研究所長） 中島国彦

研究分担者

- コロンビア・プロジェクト…陣野英則 十重田裕一 ハルオ・シラネ 鈴木登美
- イナルコ・プロジェクト…丹尾安典 千葉文夫 アンヌ・バヤール-坂井
- アジア・プロジェクト…河野貴美子 高松寿夫
- メディア・書物・注釈プロジェクト…兼築信行 竹本幹夫 宗像和重
- 現代・制度・都市プロジェクト…大日方純夫 高橋敏夫

連携プロジェクトと テーマプロジェクトとの交差



コロンビア・プロジェクト報告

本プロジェクトにおいては、欧米、ひいては世界における日本文学・日本文化研究の最重要拠点というべきコロンビア大学東アジア言語文化学部の教員ならびに若手研究者たちとの継続的な共同研究を推進してゆく。

〈これまでの経緯〉

本学の大学院文学研究科は、コロンビア大学との間でダブル・ディグリー・プログラムを設けている。これは、文学研究科博士後期課程の学生と、コロンビアの Ph.D. コースの学生が、相手方の修士課程に留学して修士の学位を得るというユニークなプログラムである。双方の研究機関としての「強み」を利用しつつ、今後の国際的な日本文学・日本文化研究を担うべき優秀な大学院生を育成してゆく仕組みといえよう。

こうした研究者養成プログラムとリンクする形で、コロンビア大学との研究面での交流も既に積み重ねられている。たとえば、2008年3月には本学の兼築信行教授が、また2009年3月には十重田裕一教授が、コロンビア大学にて授業を担当するとともに、国際シンポジウム・ワークショップに参加し、コロンビア大学のハルオ・シラネ教授、鈴木登美教授たちと協力して大きな成果をおさめている。

一方、2007年11月にはコロンビア大学のポール・アンドラー教授に、2009年1月にはハルオ・シラネ教授に、早稲田での特別講演をお願いし、いずれも好評を得ている。

〈これからの予定〉

2009年度後半については、既に以下の企画が決定し、その準備が着々と進んでいる。

・2010年1月12日、早稲田大学にて「国際交流・学問・教育の発展—日本文学・日本文化研究の将来—」と題する共同ワークショップを開催。「国際的、世界的な研究の展開をどう開拓するか」、また「それを担う人をどのように養成するか」という2点を中心のテーマとし、これからの展望を図る。ラウンドテーブル形式で、両大学の教員による基調報告、ならびに上記のダブル・ディグリー・プログラムに参加した大学院生たちの発言をもとに討議する予定。

・2010年3月、日本中世文学の日下力教授をコロンビア大学へ派遣。約1か月の集中授業を担当する。また、コロンビア大学で開催される予定の研究集会には、日下教授ならびに関係の若手研究者が参加する予定。

次に、2010年度以降については、以下のような企画が検討されている。

・これまでのコロンビア大学での国際シンポジウム・ワークショップ等の成果をまとめた刊行物を発行する。

・毎年3月、コロンビア大学における国際シンポジウム・ワークショップを共催（そのテーマは、重点領域研究の「メディア・書物・注釈プロジェクト」及び「現代・制度・都市プロジェクト」の研究成果を反映させたものとする予定）。

・コロンビア大学の教員、ならびに関係する欧米の有力研究者を招聘し、特別講演会などを開催する（2010年度の特別講演に関しては、既に交渉を開始している）。

（コロンビア・プロジェクト分担者 陣野英則）

イナルコ・プロジェクト報告

このプロジェクトは、イナルコ [INALCO (Institut National des Langues et Civilisations Orientales)、フランス国立東洋言語文化研究学院] の CEJ [Centre d'Etudes Japonaises、日本研究センター] に所属するスタッフとの連携によっておこなわれる共同研究である。イナルコ側では、すでにこの計画に対する助成申請をフランスの総合研究指導機関 ANR (Agence Nationale de la Recherche) に提出し、研究資金獲得の見込みがたっている。

2009年6月10日に、イナルコのアンヌ・バヤール・坂井 (Anne Bayard-Sakai) 教授およびミカエル・ルッケン (Michael Lucken) 教授と、中島国彦・十重田裕一・千葉文夫・陣野英則・丹尾安典等の重点研究領域申請者たちとの打合せがおこなわれた。その際に、共同研究のテーマを「記憶の痕跡」とすることが決められ、戦争が終結した1945年から今日にいたるまでの期間を中心に、日本における歴史言説や文学・視覚イメージ等の表象文化が、「記憶装置」として過去とどのように対峙してきたかを、検証してゆくこととした。また、イナルコ・早稲田の両者が参加するワークショップを毎年交互に開催することも合意された。

2010年・2012年は東京で、2011年はパリで開催し、2012年にはパリで総合的なシンポジウムをひらく予定。そして、2014～2015年にかけて、その成果を刊行物に集約させることができれば、と考えている。

2010年のワークショップについては、ある程度の詳細は決まっている。開催日は10月16日(土)である。当日は、イナルコ・早稲田両者の専任スタッフのみならず、博士課程の学生や非常勤講師等をふくめた幅広い層の研究者の参加をうながし、それぞれの研究テーマを提示してもらい、参加者相互の研究連携の可能性をさぐりつつ、問題の共有化をはかってゆくつもりである。

なお、当プロジェクトの研究テーマと関連する企画として、文部科学省オープン・リサーチセンター整備事業の助成を得て會津八一記念博物館がおこなった「記憶と歴史—日本における過去の視覚化をめぐる—」と題するシンポジウムの報告書が2007年3月に刊行されているので、適宜これを参照していただきたい。

（イナルコ・プロジェクト分担者 丹尾安典）

アジア・プロジェクト報告

歴史的に見て、日本の文学・文化がもっとも多くの影響を受け続けてきたのは、中国・朝鮮半島からであったことは、改めて言うまでもないことである。双方の影響関係は今なお活発で、新たな展開や局面をも見せている。当プロジェクトでは、過去の交流・受容の検証とともに、こんにちの相互交流の促進も模索する。これまでに築いてきた中国・韓国の諸機関・研究者との連携を一層密にし、必要に応じて随時、共同研究・シンポジウム・講演会等の学術交流の場を実現させる態勢が整っている。以下、具体的な研究計画として、現時点で想定される事柄のいくつかを示してみたい。

・漢籍研究

近年の中国では、海外にのみ現存する典籍＝「域外漢籍」の研究がさかんであるが、日本にはその対象となる典籍が特に集中して保存されている。中国側の研究成果は、「域外漢籍」を受容した当時の日本側の関心の所在を測るにあたって、重要な示唆となることが期待される。まだ十分な検討が施されなかったり、紹介すらされていない日本側資料は、仏教関係典籍を中心に少なくとも、それらの情報を提供しつつ、中国側の最新情報をも取り込むことで、双方にとって研究の進展が期待される。また、韓国で近年、続々と発掘・解読が進められている木簡に関する最新情報も、日

本の漢字表記の歴史の解明に重要な手がかりとなりそうであり、情報収集と現地研究者との意見交換を計りたい。

・テキスト・データベースの充実

中国の諸研究機関では、すでにきわめて充実した古典籍のテキスト・データベースが公開され、世界各地の研究者に便宜を提供しているが、日本漢文の同様なデータベースの公開も待望されている。すでに一部は「平安朝漢詩文データベース」として公開しているが、「メディア・書物・注釈プロジェクト」との連携を図りつつ、信頼できる良質の日本漢文のテキスト・データベースの充実を遂げたい。また、中国側諸機関（北京大学など）から、既存のデータベース構築に当たってのノウハウの提供を受けて参考としたい。

・招聘研究者による講演会

日本滞在中の海外の日本文学・日本文化研究者を招聘し、講演会をはじめとする、学術交流の機会を設定し、双方の最新情報の交換を積極的に行う。コロンビア・プログラムに関わっている欧米の研究者とアジアの研究者との交流の場も提供して行きたい。

(アジア・プロジェクト分担者 高松寿夫)

メディア・書物・注釈プロジェクト報告

本プロジェクトにおいては、早稲田大学図書館等、大学所蔵の文学・語学資料のデータベース構築及びその活用により、若手研究者を育成、研究活動に巻き込みながら、新たな本文研究、注釈研究を提示してゆく。また、注釈、書物、挿絵等についてのメディアとしての意義に関する研究の展開を期する。具体的なテーマとしては、以下の各項を立て、研究を推進する。

- (1) 早稲田大学図書館古典籍データベースを用いた、新たな研究会活動のモデルを確立する。たとえば、『源氏物語』古注釈書『弄花抄』、山田美妙等の近代作家の自筆資料等々。単なるデータベース化作業でなく、それを真に早稲田の強みである学問的考証を通して、「古典遺産」として実質化していく。
- (2) 早稲田大学図書館が計画している、web上で公開予定の「古典籍ジャーナル」（仮称）に、所蔵資料の調査・研究の成果を逐次発表する。
- (3) 雑誌『早稲田文学』の総合研究を外国の研究者を結集して進め、目次のデータベースを追加構築する。
- (4) 文学学術院所蔵資料（木下尚江資料など）を整理・研究し、データベース化してweb上に公開する。

また次年度以降は、和歌文学研究・物語研究・謡曲研究の諸分野において、科学研究費による下記の研究をめざし、上記研究テーマと相互補完的に連携しつつ、大規模共同研究の実現に向けて、実験的研究を行う予定である。すなわち、当該研究においては、

海外に未紹介の和歌文学作品、物語作品、及び謡曲と能楽論の本文研究を行う。

このうち和歌については、たんなる本文研究というよりは、『万葉集』以後中世和歌に至るまでの、黄金期の和歌作品・歌壇に関する研究成果を要約する作業を通じて、最先端の和歌文学研究の現状を海外に紹介し、海外研究者の研究を支援する態勢をも確立する。

物語については、海外未紹介の物語作品の本文研究のみならず、古注釈書の系統的研究を踏まえ、「源氏物語注釈書」の翻訳のための準備作業を行う。

和歌と物語からの派生分野として能を位置付け、謡曲の本文校訂に関する新たな凡例作りとそれに従った校訂本文の作成、世阿弥能楽論の本文校訂を行う。謡曲の表現の基本が和歌の表現であること、初期の能は各登場人物が物語を分担口誦することによって成り立っていたらしく、それが後々まで「語り物の二次的完成」と呼ばれる特殊な表現様式を能にもたらしている、と考えられることによる位置付けである。

上記諸分野の作品の世界を解明するために、各分担者が若手研究者による作業チームを構成し、海外のみならず、国内の研究者の協力をも適宜に求めていく。

(メディア・書物・注釈・プロジェクト分担者 竹本幹夫)

現代・制度・都市プロジェクト報告

本プロジェクトでは、近現代文学研究者と近現代史研究者とが共同して、文学や演劇映像などをふくむ文化の展開と、現実の環境の史的展開との関係を総合的、かつ国際的に研究する。具体的には、「制度」と「都市」をキーワードにして近代以降の日本文化の特質を明らかにすること、そこでの「日本」という表象・「アジア」という表象に関する新たな問題を提起すること、などである。

したがって、本プロジェクトは、「コロンビア・プロジェクト」「イナルコ・プロジェクト」「アジア・プロジェクト」「メディア・書物・注釈プロジェクト」の研究と関わり、それらを随時補完するとともに、全体をまとめあげる役割を担う。研究員は、本プロジェクトに関心を持つ多数の若手研究者らと、他のプロジェクトの研究に参加し、そこで得られた成果をも活用して本プロジェクト研究を推進する。

初年度および次年度に計画する研究テーマは以下の三点である。

1. 大衆文学誕生と「都市」の新展開とのかかわりをめぐる総合的研究。1920年代に誕生した大衆文学は、純文学が時代からの自律を志向するのに対し、時代と社会との深いかかわりを求めて自らを形成する。初期大衆文学の八割を占める「チャンバラ小説」

は、同時代のなにを吸い上げ登場したのか——これを考察することに総合的研究の端緒を求めたい。

2. 「日本」および「アジア」表象の成立と変容と現在をめぐる総合研究。「日本」のエッジであるとともに「アジア」のエッジでもある「オキナワ」の動向は、近現代をとおり「日本」表象に大きく影響してきた。とくに戦後のオキナワ文学の考察から「日本（ヤマト）表象のありかたを浮彫にする。

3. 現代都市伝説・神話とエンタテインメントとのかかわりをめぐる総合研究。エンタテインメントの最先端を走るライトノベル、携帯小説には、現代都市・メディア環境がうみだす恐怖や不安や快楽が充満している。なかでも突出する「ホラー」表象を手がかりに、都市とメディアの変容がもたらしつつある新たな言葉・感情・身体を考察する。

以上の三点をめぐって、研究員と若手研究者との勉強会、連続講演会や国際シンポジウムなども積極的に展開する。

(現代・制度・都市プロジェクト分担者 高橋敏夫)

Event calendar

コロンビア・プロジェクト 共同ワークショップ 「国際交流・学問・教育の新展開 —日本文学・日本文化研究の将来—」

○日時:2010年1月12日(火) 15:00～18:00(予定)

○場所:大隈会館N棟2階201・202

○基調報告:ハルオ・シラネ、鈴木登美、竹本幹夫、宗像和重、兼築信行、十重田裕一

○院生・基調報告:柴山紗恵子、ロバート・ヒューイト、由尾瞳、アンリ・ヤスダ、ネイサン・シャッキー、ロバート・タック、時野谷ゆり、庄司敏子、塩野加織

活動記録・予定

11月9日(月) 重点領域研究採択決定

11月11日(水) 研究所設立準備会議

11月18日(水) 研究所第1回全体会議

12月16日(水) 研究所第2回全体会議

1月11日(月)～14日(木)
韓国康熙大学校学部学生来日研修

1月12日(火) コロンビア・プロジェクト
共同ワークショップ開催



これまでの講演・シンポジウム・ワークショップから

重点領域研究「世界と共創する新しい日本文学・日本文化研究」 News Letter 第1号

2010年1月12日発行

編集:庄司敏子・塩野加織(RA) 印刷所:三美印刷

発行所:〒162-8233 東京都新宿区戸山1-24-1 早稲田大学文学学術院内

早稲田大学国際日本文学・文化研究所(WIJLC)(所長・中島国彦)